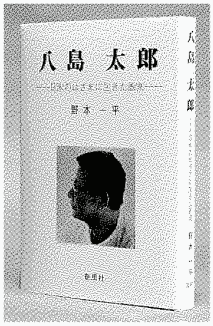
八島太郎

時代に強いられた変容

旧根占町に生まれ、プロレタリア芸術活動に参加し、一九三九(昭和十四)年に渡米、戦争中は米国戦略諜報局(OSS)の仕事にかかわり、八十五歳で他界するまで、ヒューマンな絵本作家としても活動した画家・八島太郎の生涯を描いた熱著である。著者の野本氏が、西本願寺ロサンゼルス別院やフレスノ別院で長く開教徒をつとめた、いわば八島と同じ「日米のはざまに生きた」一僧徒であるという点も読む者の心を引きつけよう。

東京美術学校を中退し、三三年には獄死した小林多喜二のデスマスクを描き、やがて一人娘モモの誕生をきっかけに絵本世界にのめりこんでゆく経緯など、著者はその足跡を丹念にたどりながら、八島が常に抱えていた「望郷」と「反骨」という心の揺曳をもあたたかい文章で包み込む。プロレタリア美術家、漫画家、米国戦略諜報員、児童絵本作家、自由律俳人、とめまぐるしい変ぼうをとげた、どちらかといえば毀誉褒貶平ばする八島太郎観に対しても、「どれも太郎という人の人間の資質から、つむぎ出された人生の綾織」と慈しみの目を向けるのだ。



野本　一平著

(創風社・一七八五円)

ただ、そうした著者の感傷や感慨を超えてこの書が伝えてくれるのは、八島太郎が生きた「あの時代」の持つ、あまりにも不条理だったというしかない価値観の変容だろう。「真珠湾の夜」を描き「蟹工船」を描いた八島は、終戦前同じ絵筆で日本軍にむけた「銃を捨てよ」という宣伝ビラを描く。そこにあるのは、「めまぐるしく変化した画家」八島太郎の姿ではなく、そう「変化せざるを得なかった画家」の激浪に満ちた一生なのである。

八島がアメリカで発表した児童絵本の代表作「からすたろう」は、終生まぶたに描き続けた故郷鹿児島の一僻村を舞台にしたもの。著者自身の日米の「はざま」で生きた体験を重ねつつ、終章で八島太郎について「それは自分が生れて、育った国で、やがて終るいのちではなく、祖国をはなれた異国で、自分の世界を拡充し、展開していった人のこと」と語る部分に、深く共鳴する薩摩人は多いに違いない。

(窪島誠一郎・「信濃デッサン館」「無言館」館主、作家)